

解説



第30回品質工学研究発表大会の振り返り

Review of the Research Presentations at the 30th Annual Meeting of Robust Quality Engineering Society

審査表彰部会

明吉 秀樹^{*1}
Hideki Akiyoshi

安藤 力^{*2}
Chikara Ando

糸久 正人^{*3}
Masato Itobisa

山村 希志臣^{*4}
Kishio Tamura

浜田 和孝^{*5}
Kazutaka Hamada

見原 文雄^{*6}
Fumio Mibara

1. はじめに

田村 恒例の研究発表大会の振り返りを行う。今回もまずは「品質工学会の目指すところ」を確認しておく。

【目指すところ】

品質工学の開発・研究を通じて、あらゆる分野における総合的な評価体系を提供することで以下に貢献します。

1. プロセスの生産性の向上
2. 製品・サービスの創出
3. より豊かで自由な社会の実現

これらのうち3は1、2の実現によって達成されると考えられるので、今回も1、2の観点から振り返りを進めたい。加えて、大会の振り返りであるから、大会テーマにどこまで迫ることができたかも議論したい。では、最初に大会実行委員長の浜田さんから一言お願いする。

浜田 昨年に続き今年も「ITとの結合で進化する品質工学」を大会テーマとした。ここ数年、とみにIT技術あるいはデジタル技術の進化によって、今までできなかったことができるようになってきた。それを背景に新しい領域の取組みを期待したテーマだ。今回、発表賞を受賞した4件はいずれも領域の新しさ、適用の新しさを備えていたと思う。

2. 農業分野におけるサービス創出

田村 製品・サービスの創出というどうしても工業分野における新製品開発のイメージが先に立つが、もちろんそこに限定されるものではない。今大会では、メロンの熟成モニタリングに関する研究発表¹⁾があった。これは発表賞金賞を受賞している。これまでも農業関係の研究発表はあったが、収穫後の作物の熟成状態の診断は新しい研究テーマだ。これは農業分野における新しいサービスの創出につながる可能性がある。

安藤 新しい品質工学という点から言えば、メロンの熟成というのは一つの題材であって、こういう類いのものに広く活用できる可能性を具体的に示したことに大きな価値がある。一方で、メロン熟成の指標としては糖度計の値などが利用されている。そうした既存の技術に対してどういった利点があるかも示されていると、もっと説得力が出ただろう。これは今後活用を広げるための課題でもある。

^{*1} 明吉事務所

^{*2} 富士ゼロックス(株)

^{*3} 法政大学

^{*4} コニカミノルタ(株)

^{*5} Hamada Quality Solution

^{*6} (株) 日本能率協会コンサルティング